

井上城址



高越山麓の扇状地が井上名である。この台地に細川常有が築城したのは、宝徳3年(1451)のことで川田城と称した。

常有の曾孫元常の時、代官谷馬之助が背いたので土肥綱真にこれを討たせ、丹治常直に綱真を留守居として城を守らせた。

その後、三好氏の京都進攻のために細川氏は衰退し、元常は本領和泉の国を失い領地川田和泉屋形に幽居し、天文23年(1554)に没した。川田城は領主を失い、永禄年間(1558～1569)綱真の子孫土肥紀伊守庸吉は丹治常直を殺し、この城に拠って井上城と称した。この城は川田川から500m距った天険をたのんだ要害堅固な城である。

阿波鎮国の名山で、信仰のシンボルである高越山を背負い、東方は川田川、近くは御屋形谷が自然の防備となり、その下に広々とした城下町を持った城である。天守閣を持ったものではなく、館城(平城)である。



柳の井

この所に「柳の井」といって、井上城をめぐる三名水の一つがあった。ここんと湧き出る清水は「井上城」の水源として、また中世になって武將の心得として盛んになった茶道の水として用いられた名泉があった。今は水涸れ状態になっている。



関閼の泉(関閼井の井)

関閼井とは、梵語で仏前に供える聖水といわれている。ここには、昔大坊惣持院といわれる細川氏、土肥氏の菩提寺があり、毎日仏前に供える水は、この関閼井の名水が用いられた。この泉、弘法大師の妙力によって湧き出たという伝説がある。

明王院の二重堂と松月翁の碑



吉野川市指定有形文化財(古文書)

松月翁の碑

明王院境内東側の土堀ぎわに造立されている。松月翁は周防国岩国(現山口県岩国市)出身の僧で、19年間に及んで諸国に滞在し、天明元年(1781)に阿波国(現徳島県)にとどまり住むこととなった。翁は和歌に精通しており、奥川田の歌人鹿児島政明らを指導した。緑色片岩製で、西面には「松月翁」、東面には歌題である「行路雪」の3字の周囲にひらがなで「ぬるるままそののへへつつここははややまたたににふぶきき糸ぬぬ」(「濡るる儘ぞ園、野辺経つ此処は早や、山又谷に吹雪消え得ぬ」)という短歌を彫っている。



う-3

大坊の板碑



貞治2年(1363年)に建立されたもので、南北朝時代の気魄に充ちた梵字である。

板碑は、追善供養のために建立されたもので、石の頂点を三角形にして、その下に二条の切り込みをつくり、その下に梵字、仏像、法名等を刻む「石造卒塔婆」「板石卒塔婆」といわれている。

大坊の板碑に刻まれた梵字「アク」は「不空成就如来」を表し、「釈迦如来」と同体である。仏法の法により人々をあらゆる苦悩から救って人生の安らぎの道に導いてくれる仏様といわれている。

青木城址



青木城は、天文3年(1534)市原(篠原)石見守兼継がこの地に築城した。もと瀬詰城に拠っていたが、縁籍により土肥因幡守と領地大塚二町地をこの土地と交換し移ったものである。城は東は安楽寺丸、西は太郎丸、南は中の丸、幸神丸を構えていた。

北は蛭川の絶壁であり、西面には大小2つ、南面には1つの濠の痕跡が見られる。要害堅固に築城され井上城と相呼応していた。

城主市原造酒正兼頼(三吉丸)は、天正6年(1578)長宗我部の侵略の時、脇城外に井上城主土肥新右衛門秀実とともに出陣したが川田村加久(奥川田久宗)で没したと伝えられる。

う-3

徳島県指定有形民俗文化財

う-2

川田手漉和紙製造用具



山川町川田村で過去に使用されてきた手漉和紙製造用具のコレクションである。もとは旧川田公民館で収集、保存されていたが、現在は吉野川市山川地域総合センターに移し、保存、展示されている。旧麻植郡(現吉野川市)の大部分および美馬市木屋平)では、旧麻植郡川田村(現吉野川市山川町)だけでなく、木屋平、種野、東山、別枝、桁山などで製紙業が盛んであった。高尾家の文書記録によると、蜂須賀入国天正13年(1585)時にはすでに川田村で製紙が行われていたと考えられている。時代によって材質などに変化があるものの、形状は現代のものとも共通する部分が多い。阿波和紙製造技術の変遷を今に伝える貴重な資料である。

徳島県指定無形民俗文化財

う-3

山川町神代御宝踊



もとは神いさめの踊りとして京の都で踊られていたものを、都に上った川田村の者が習い覚えて持ちかえり伝えたものという。『麻植郡川田邑名跡志』(鹿児島県政明1788)の記録から、雨乞いの踊りとして江戸時代には当地で踊られていたことがわかる。明治時代半ばごろに中断されたものを、この地の原田武一郎が大正時代のはじめに再興した。その後再び中断されたものの、『川田町史』(川田町役場1930)編纂の際に調査された古記録と口伝をもとに、川東名の古老や有志が再興し、現在のような豊年踊りの形態となった。現在は毎年10月22日の川田八幡神社例大祭で奉納されている。

吉野川市指定有形文化財(歴史資料)

う-2

芳川顕正伯爵生家の遺品



川田村(現吉野川市山川町川田)出身で、明治時代に文部省、司法省、内務省、逓信省の各大臣など政府の要職を歴任した芳川顕正にゆかりのある遺品である。遺品は木像、書画、伝記等であり、昭和15年(1940)に皇紀(明治政府が制定した、神話に登場する神武天皇が即位したという年を紀元とする紀年法)2600年および教育勅語発布50周年を記念して創立された芳川顕正伯遺業顕彰会により、芳川の生家内に保存されていたものである。書画には、越山という雅号で漢詩家としても足跡を残した芳川による作品がある。これらの遺品は、当時の状況を今に伝え、かつこの地域出身の偉人にゆかりのある遺品として重要な資料である。

吉野川市指定無形民俗文化財

う-4

川田山王子神社百手祭



百手祭とは、「御魔射」ともいい、その年中の悪魔祓いを祈念するために行われてきた弓を射る祭事で、現在は王子神社の氏子である大内、榎谷の地区の人が伝承しており、毎年成人の日(王子神社)の的場であった川田山小学校跡地で行われる。以前は1月15日であったが、近年は射手の確保等の理由から、祝日である成人の日に行うこととなっている。古来より川田八幡神社、楠根地白人神社、皆瀬御崎神社でも行われていたという。祭事に際して伝承されている弓道は、攻撃の型である。神官による儀式的のち、祭事が始まる。これを矢始めという。射手は矢が的から外れると、決まりに沿って射続けなければならない、そのことを「しまどい矢」という。

う-2

平成の鹿服調進・製織機類



平成の大嘗祭に調進する鹿服を製織した製織機類である。

忌部氏は天皇が即位する大嘗祭に鹿服を調進する重責を代々担ってきたが、南北朝時代に途絶えていた。

大正天皇の大嘗祭に、577年ぶりに復活し、昭和、平成、令和と忌部神社で製織された鹿服が調進されている。



山川地域総合センター

え-3

赤岩将監狸の祠



国道193号を南へ美郷方面へ向かう途中「山川トンネル」がある。この手前東側の山中に「赤岩将監大明神」の祠があり、畳4枚ほどの大岩がある。下部に穴があり、そこから狸が出入りしたのであるだろうか。今は木々が生い茂る山道を行くのだが、平成の初期名古屋から商店主が観光バスで訪れたこともあった。実は将監狸は商売繁盛の神様で、霊能力を持っていて多くの方に崇拝されていたという。そのため祠のある現地には店が立っていた記録がある。徳島県には狸伝説が多く「阿州有名狸番付」によると、東方の横綱には小松島の「金長狸」、2位には「将監狸」が大関として君臨していた。